

紹介（伊木まり子後援会-伊木まり子と生駒の未来をつくる会 ホームページ プロフィールより）

平成17年3月、戦後60年の歴史を持ち、生駒市唯一の公的病院として生駒の医療の中心となってきた奈良県国保連合会生駒総合病院は、閉院通知からたったの3ヶ月で、後継医療体制も決まらぬまま閉院とされました。

当時、伊木まり子は生駒総合病院の医局長でしたので、患者さんを見捨てた閉院の過程をつぶさに見ることとなりました。不安をつのらせる患者さんたちの話を聞き、治療がとどこおることのないようにと、他の病院や診療所の先生宛の紹介状を書く毎日。その数400通近く。こんなことが2度とあってはならない、と強く思ったのでした。この体験が閉院後も「市民の病院をつくる会」の代表世話人として運動を続ける原動力となりました。「つくる会」は生駒総合病院の後継医療の確保を求める署名活動を2次にわたって行い、3万筆近い署名をいただきました。その結果、山下市長は新病院建設に向けて動き始めました。



しかし、議会が病院建設用地の購入に待ったを掛けました。なぜ？平成19年1月、初めて市議会を傍聴した伊木まり子はそこでの議論にびっくり。これが市民の命を守る医療を議論する場?? 議会は3万筆の市民の思いを見捨てている。それは患者を見捨てたあまりに乱暴な閉院とまったく同じやり方です。市民の命と健康の問題を市長いじめの政争の具にしている。伊木まり子は市議会議員選挙への立候補を決意しました。

右も左もわからない選挙戦でしたが、多くの方に支えられ当選。それから3期を勤めさせていただきました。その間、紆余曲折はありましたが、生駒市議会は市立病院を設置するための条例を制定し、医療法人徳洲会に指定管理者として運営を任せる公設民営の市立病院事業を進めてきました。そして、平成27年6月、生駒市立病院は開院しました。

しかし、病院ができれば、それでいいというわけではありません。市立病院と近隣の医療機関との緊密な連携があつてこそ、市立病院を活かすことができます。介護とのシームレスな連携も必要です。市民の側も医療と介護のシステムをうまく利用できる賢い患者、賢い市民になる必要があります。一方で、児童虐待や高齢者への虐待といった悲しい出来事が報道されていますが、生駒も無縁ではありません。そこで、伊木まり子は、『命より大切なものはない!』の大原則に立ち返り、

市立病院を最大限に活かした安心の医療のまち

こどももお年寄りもいじめや虐待でいのちを落とすことのないまち
を実現するために、もうひとがんばりしたいと思います。